

三宝成就の信心

本 多 弘 之

一

眞実の信心があらゆる疑いを破って、自己の眞実性を見いだしてくるためには、一方に信の自立の道程があり、また一方に信の自足の構成条件がある。親鸞は、法蔵菩薩の願心の中に、この両面がすでにして語られてあることを見いだした。道程は三願の転入であり、自足の条件は眞実信心の三要素「至心・信楽・欲生」であると。信心の中に三心を開くには、それなりの意味と理由があるに相違ない。親鸞は「涅槃の眞因は唯信心を以てす」と決し、決定の一心に仏道の証しを確信したにもかかわらず、ことさらに三一問答を起して、『大経』十八願に語られる至心・信楽・欲生の意味を探索した。「仏意測りがたし」と表白しつつも、信心の三相の意味を明らかにしようとした。

親鸞が信に三相を見ようとしたのは、その本は『観経』にある。善導の『観経疏』三心積の指摘を通して、『観経』の三心が三相によって必生彼国の一心を顕わすものであることを知った。信心には内面に信を歩ませるものがある。信心自身が自己を明証してくる原理がある。そして、その信が、大乘仏道の悲願を具体化する眞の原理と条件を満足していることを知ったのである。

およそ意識現象というものは、一般に三相によって押えられることが多い。感情・表象・意志とか、知情意とか、仏教においても、知恵・慈悲・方便とか、聞思修の三慧とか、戒定慧の三学など、意識現象を三面から把握ることによってよくその特質が押えられることを示している。

しかして眞実信心が「至心信楽欲生」と書き表わされてあることの中に、信ずるといふ精神作用に含まれる三

相を読み取ったということには、『観経』にならったというだけではない意味がある。その釈を通して、実は『大経』のこの三心は、信心を構成する要素であるというだけでなく、これによって人間の宗教体験がそれ自体に充足するだけの内容をもっていることを示そうとするのである。そしてこの信の三相を明らかにすることによって、信の一念において仏道を現前し得るとする。

仏道の伝統において主体的に仏教徒たることを表明する言葉は、しばしば造論の始めに表白されるように、三帰依文である。三帰依は、現に仏道が伝承されてあることを信じ、その伝統に帰することを表明する証しである。この三帰依の十分な表明が、実は仏教における信の内面になければなるまい。仏教の伝統において仏陀の教法を信じ、仏陀の久遠の願いを体した菩薩道を信ずるならば、三帰は自ら表出するものであるのか。されば真実の信心とは、三帰を生み出すものとなるであろうか、それとも三帰があつて信が純化するのであろうか。しかしその場合の帰依さるべき三宝とは、一体何であるのか、仏法僧というが、この現代の世においてその内容は一体何なのか。末世の三宝については、『末法灯明記』にも論ぜられるところであるが、末法に三宝を回復すること

が、仏弟子にとって至要であることは間違いない。三宝が帰命されてこそ、仏弟子となって仏道を歩みうるのである。本論はしばらく親鸞の三一問答釈を手がかりにして、真実の信心が三宝の意味にどう答えるのかを考えて見たい。

二

「信巻」の至心釈を読んでみると、善導の至誠心積によって、至心が「真実心」であることを見いだし、その淵源を『大経』の法蔵菩薩の因行に見いだしている。如来を信ずる信念が、涅槃の因となることができるのは、ひとえに如来の至心による。如来の至心とは、如来の至誠心、すなわち真実心である。その如来の真実心の、真実たることを『大経』の法蔵菩薩の修行に見いだし、信心が願心の成就であることの意味を知らされるのである。信が真実であるといってみても、我等の意識に映ずる信は、虚仮の上着をまもってしか自覚されない。純粹清淨の信とは、一切苦悩の衆生を貫いて真実たらんと立ち上る宗教的要求の自覚しかない。兆載永劫に修行する主体とは、個人の努力意識などではなく、如来の悲心が凡心を摂して、それによって凡情の中に映し出される真

実心の作用である。それを我等は自己のものとはできない。

我等の上に映じて、我等にとって他なる大悲心である。大いなる他なるが故に、我等を撰して一切の群生の主体となつて、「穢悪汚染にして清淨の心なく、虚仮諂偽にして真実の心なき」人間の浮相に従いつつ、不可思議兆載の時に堪える志願となる。清淨の真心とは、不淨なる愚悪の群生海を悲しみ、真心たらんとする宗教的要求に応ずるものである。永劫の時をかけて、真実たらんとするものを発掘し、真心たらんとするものを育成し、成熟せしめてきた大悲心の永続性は、個人の意識を超えて十方衆生の心底に永劫修行の宿因を蓄えている。静かに醜醉する時を待ちつつ、不淨の現実に絶望もせず、貪瞋の悪世を捨てもせず、むしろ穢悪なる事実を荷つて、宗教的要求を支持しつづける悲願、それこそ大乘菩薩道を荷負つた名前・法蔵菩薩として語られたる宗教体験である。菩提心の歴史こそ、一切人類の汚濁の中に真実を見いだし、真実を生み出し、真実そのものとなろうとした法蔵菩薩の歴史である。欲覚・瞋覚・害覚を起し、欲想・瞋想・害想を起し続けて止むことのない、愚悪なる一切衆生の歴史の基底に、虚仮ならざる、諂偽ならざる、空虚ならざる真実を求め続けた如来清淨願心の歴史があ

る。

至心の教言に真実の背景を受け取るところに、至心を求め至心を具現した三世諸仏に出会うのである。三世諸仏を生み出した真実心の歩みを仰ぐのである。『涅槃經』によつて「真実とは如来なり」といわれる。真如実相の如来は、真実心の情念を燃やし、真実の明るみを灯さんとする悲心とならねば止まない。仏教の真実とは、理性に映る冷徹なる対象的法則ではない。煩惱の生活をしていても、深くうなずかざるを得ない如来の言葉である。如来の言葉を通して聞こえてくる涅槃の灯火である。そして如来の教言を生み出した菩提心の要求と、それを継承した菩提心の荷い手たちが、皆もろともに阿弥陀の本願の中に自己の志願を投げ込んで、深く阿弥陀を仰ぐことができた。阿弥陀の至誠の前に、自己の志願の全てを無にして、阿弥陀を讃えることができた。仏道の歴史の根源を阿弥陀に見いだすことができた。その因位法蔵の真実とは、従つて三世諸仏の久遠の背景である。三世諸仏の願いにふれるということは、法蔵因位の願行に感応することよりほかにない。諸仏平等の衆生救済の志願を、衆生の上に至心となつて成就せんとする法蔵の願心の前に、諸仏は三世の求道の歴史を捧げて供養するに相違な

い。「一切煩惱惡業邪智の群生海」は、ただ無辺無尽なる大悲心のみが、よく摂してその転成の方向を与えることができる。無辺の大慈悲とは、三世諸仏のみのよく恭敬しうるところであらう。仏と仏との境界においてのみ無辺無尽の慈悲が響流する。凡夫はただ邪智邪見の生活に即して、願行成就の名号において如来の悲願を頂戴することができる。如来の教言として与えられたる法蔵因位の修行の中に、三世諸仏の願いを超えて、三世諸仏が誓って止まない衆生救済・仏道成就の悲願を具体化する名号の意味を知ることができる。至心とは、信における諸仏の伝統との出会いである。仏道の歴史との出会いである。惡業邪智を破らしめる如来の真実との出会いである。積尊の教言の奥底から叫びつづける大慈悲心との出会いである。我等はまことに三業ともに虚仮不実なる煩惱の歴史を荷って生きている。人類の煩惱の歴史の必然として、人間の上に煩惱生活が現成するものであるならば、仏道の真実もまた三世諸仏の求道の歴史の必然として、煩惱生活を転じ愚鈍の痴情を転じて、仏道の悲願を現成せずにはおかない。『大経』が、仏道の実践は名号を称念するにあるというのも、この大悲心の源底から名のりあげた仏名を、諸仏が讃歎してきたからである。在家出

家を問わざる無数の人々が仏名の功德に遇って救われてきたからである。仏名において仏の悲願が現にはたらくからである。仏名に真実の証しが具現するからである。「至心はすなわち至徳の尊号をその体とせるなり」とは、法蔵の誓う至心が三世諸仏の真実の歴史の中から真実心を発掘し、それを愚悪の衆生の上に現成することができるのは、この諸仏称揚の名のみであるからである。虚仮不実の身心には、一切の物質的精神的満足というも、虚飾・虚栄・刹那的な充足でしかない。生命を尽して、身命を捧げて悔いがないような充足とは、真実の歴史を貫いてきた至心しかないという見極めは、ただ仏道のみ叫びうるところである。「仏に帰命せよ」とは、真実それ自体の歴史が、仏の伝統であるからである。唯仏与仏の知見とは、真実は真実心のみ響くの謂である。しかし大乘の真実は、五逆謗法にさえ響かすにはおかぬ。大慈悲の誓願は、仏智を疑う我等に、仏道の廣大無辺の歴史を、名を称する無数の人々の伝承を通して教えようとするのである。至誠心という一語の中に、善導が『大経』の背景を見いだしたのは、三業虚仮の身にすら「願彼仏願故」の声が聞こえたからである。内外明闇をえらばず、名号の響流する諸仏の境界にふれたからである。「真実

心なき身」なればこそ、法蔵の永劫修行の意味がある。無数の諸仏の証明の意味がある。諸仏の護念証誠があることこそ、我等が愚痴邪見にして憍慢懈怠なる証明である。経文は至心において、「専ら清白の法を求めて群生を恵利しき。三宝を恭敬し、師長に奉事しき」と語っている。三宝帰敬のまことは、まず至心なる仏道の歴史との出会いの中から与えられる。三世諸仏の願ひの中から与えられる。三世諸仏の平等の願海は、一切衆生の苦悩を荷う平等の大悲心にある。信心のもつ大菩提心の意味は、第一にこの至心のもつ仏道の伝統との出会いの内にあるとすべきであろう。すなわち、至心は三宝の内仏に帰依することと相い応じて、より深くその内容を徹底するものであるといえよう。

三

信の第二要素を経文は「信楽」と名づける。信楽とは正しく信心そのものの相である。いうまでもなく親鸞はこの信楽の一語の中に、信のもつ純粹清浄の意味とともに、生存の歡喜の相を読み取っている。無明と愚痴、苦悩と不安の空虚ないのちに対して、信心のもつ充実性を読んでいたのである。信ずるといふ意識にとっては、こ

の現在の充実ほど信の有意義なるを証しするものはない。信心歡喜という言葉ほど、宗教体験の直接的明証はない。生命が充実していることほど、真実のいのちを証しするものはない。疑蓋がないということこそ、信の純粹なる充溢性を表わしている。信の純粹性を顕彰するものこそ、歡喜の相である。「十地品」には、菩薩初地の歡喜には、怖畏心がないといわれている。生存そのものからくる不安とか恐怖とかは、生の空虚さに由来する。生活の一瞬一瞬に充実せる信頼があるならば、与えられた生命は歡喜の日日になるはずである。生命の終りすらも、いよいよ歡喜を浮きぼりにすることができる。親鸞は信心の徳において、人間の独立性を語っているようである。信の与える生活とは、如来の家に生れて、如来の家において生きることである。疑うべくもなく、人間が何ものにも縛られず、何ものをも恐れず、独立する道がそこにある。「自によって他によらざれ」との遺言は、信心歡喜のところに自足される。他を求めずしてすでに満ち足りて、魔の誘惑も受けたいという喜び、そこに自立せる信心の人がある。『涅槃經』によって、大信心が人間に一切衆生悉有仏性の信頼を回復せしめ、一地の自覚を与えて、「如来と等し」い位を与えるという。

信の生活とは、如来と等しいという尊厳性の自覚において、独尊なる自重の生活が始まるのである。

そういう信ということを生起せしめるものが、聞と思であることを『涅槃経』によって示されている。信心心というは、聞思によって獲得された知恵である。信心歓喜ということも、教法によって導かれ、教言に励まされる生活に感ぜられるものである。聞を通して教に触れ、教に繰返し接することによって真実を教えられる。真実は、疑いと迷いと対話と思惟をくぐって、いよいよ真実なることを確証していく。信心の意識を満たす相が歓喜であるなら、その信心を常に現成せしめてくる内なる作用が聞と思である。聞も思もその対象は教法である。教法に説かれたる真実である。教法を聞思していくことによって、信心が歓喜の相をうる。真実誠満、歓喜賀慶の心は、諸仏が求めた真実を聞き開き、自己の宗教体験となるまで思惟することによって、信心の人に与えられる。煩惱具足にして不平不満なる生活意識からは、考え及ばない涅槃界の満足が、仏陀の教言を聞き開くことを通して与えられる。法蔵因位の修行は、五劫思惟を経て発起する。教法聞思の熏習を通して、仏陀正覚の宗教的世界の喜びが、煩惱を突破して衆生の心の底に定着してくる。

その教法とは、法蔵菩薩の因位の願行によって、名号の意義を明らかにするものである。至心を内容とし、しかして諸仏の発遣を通して開かれる信樂であるから、信樂の内なる契機たる聞思も、行きつくところは名号のいわれを尋ねることより外にない。名号のいわれを聞き知るには、自己を信知することが不可欠である。信樂という相が特に開かれるのは、教法の聞思を通して、眞の仏弟子としての自覚を開き、人間として何ものにも依存せず、この生死の大海を生き抜く力と自信を得ることを示すにある。信樂のところに菩薩の四無量心を引用しうるのも、慈悲喜捨を聞く道が凡夫の信に与えられること、法蔵の大精神の教えをうけた信心の喜びが、凡夫の生活に菩薩所修の功德を与えずにはおかないということを示すのであろう。至心が人間の理性を超えた諸仏の知恵との出会いを教える言葉であるとすれば、信樂は、人間の情緒的要求を超えて、仏言との出会いにおける生命の本来的喜び、世に生れた本懐を得た喜悅を語るものである。信樂こそ信心歓喜の現在性を表わし、現前の一念の自足をあらわすものである。具体的な宗教体験の相は歓喜にある。喜びがあるところに、宗教の事実がある。しかし歓喜賀慶の心とは、必ずしも天に踊り地に躍るほど

の強烈な相を取り続けるものではない。煩惱の興盛のなかで、生命の意味を内省せしめ、涅槃の徳を思念せしめて、仏の一道のみ独り清閑であると知らしめられる喜びである。無限なる慈悲心に遇う喜びは、日常経験に忙殺される意識にはほとんど聞きとりがたいようなものではないかと思う。しかし生死の苦悩にぶつかるとき、煩惱の与える悦楽より静かに、しかし永続して力強くさやき続ける法性の声がある。浄土は、すべての音声が如来の法音を宣流するところであるといわれるが、この世の一切の雑音は、世俗的名利愛欲の執心を増幅するものばかりである。見聞するところ、聞思するところ、すべて仏陀の教言を忘れしめるような作用と力がある。それだからこそ、信楽という言葉が我等にとって重く深い響きを持ちうるのである。

「無始よりこのかた一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信楽なし」といわれている。無始以来、凡夫に清浄なる信楽の事実などなかったのだと断言される。虚仮雑毒の善をもつて、清浄なる無量光明の土に至ることはできないという。我等の日常は、貪愛、瞋憎に覆閉されて、信楽など起りえない。信楽など全くないというのは、単に親鸞の

個人的反省ではない。無始時來の人類の歴史の中に、清浄の信楽が突然起る道理がない。清浄は仏陀の願心にのみ起りうる。仏陀の願心の歴史こそ法蔵菩薩の歩みである。だからこそ法蔵なる宗教的主体が「信楽せよ」という言葉を選んで、名号を聞かしめるのである。名号を信ずることができるのは、如来の悲憐の賜物である。法蔵の悲願の広大さは、我等の分別よりはるかに深い悲しみから出発している。どうにもならないこの苦悩の現実を、苦悩のままに引受けようとするところに、法蔵の大地が与えられる。業苦の衆生を自己の修行の場とし、邪見の群萌を自己の思惟の場とすることによって、信ずるものもなく疑網の生命を終えていく迷妄の衆生を荷負するのである。大菩提心の最後の一線がそこにある。墮獄の苦悩も共にせんというような背水の決断がある。この願が満足せずば正覚を成らじという誓いが、名号の功德となるのである。

信楽の相が歓喜であり、歓喜を聞くものが聞思である。聞とは仏陀の教言を聞くのである。教言の所詮は仏陀の悲願にある。大乘は悲願の源を明かにしてきた。大乘の対機は、愚痴妄味なるこの人間存在である。その代表がこの自身である。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ず

れば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」。一人の苦悩のために身を捨てて大悲心に出会って、凡夫の生活に新しい勇気が与えられる。信樂とはこの教法を信頼し敬礼せよということである。信樂はかくて、法に信奉せよという帰依法の内容に相應するといえることができると思うのである。

四

法蔵の大菩提心は、苦悩の自己を撰しつくして、歡喜を現成しうる。信心歡喜とは、宗教体験の伝統が証明してきた人類の真実誠満の心の表白である。されば信心は単なる個人体験ではない。個人の観念的喜びではなく、諸仏が証誠し、十方の菩薩が同じく証する歡喜地の喜悅である。閉鎖的独善的な孤高の哄笑ではなく、共に存在の苦悩を生きつつ、聞法求道せる十方衆生の喜びである。その公開された喜びを示すために、信心の内面に共同の大地への欲求を勧めるものが「欲生我國」の語である。至心が真実の求道心の歩みの表明であり、諸仏菩薩の真実心の証明を示すに對し、信樂は如来と等しい独立者の誕生を信の一念に見いだしてきた。人間の自立を表明し、与えられた信念が自己となって自己の身心を歡喜謝

恩の生活へと歩ませるものが信樂である。それは現在に絶対充足して他を求めない。すでにして現在に大慶喜心のいのちを尽すのである。それに対して新しい大地への要求とは、共同体の徳を表わすものである。そもそも浄土は仏の他受用の作用の場として、つまり国土を開いて仏の教化事業を共同する人々を生み出すための、そして聞法供養の充実を期する場として語られる。国土の要求は、個人体験に止まることのできない宗教經驗の深い祈りである。如来は自己の国土において、一切衆生の平等の充足を願うのである。もろともに真実の教法を依りどころとして生きようという公共への志願こそ、信心の公開性を示すものである。「十地品」では、三昧に沈んで最早や出るべき世界と為すべき仕事を見失った七地の菩薩が、初心の大悲の菩提心を発掘できるのは、方便力によると語られている。真実が公共の開けを持つことによつて、自己を展開する力を回復するのである。求道心を励ますものは、内なる願心であるに相違ない。しかし外なる励ましこそ内なる炎を持続せしめるものである。特に聞思の信においては、生活全体を見通している師友こそ、聞法生活の方向を厳しく問い直させてくれるものである。菩薩道は、共に歩むことにおいて、永続する願心

の真実を知らされるのである。孤高の証に入ることは二乗心であるとして、菩薩の死なりと戒められるところである。その公共性を開く国土への要求を「欲生我国」という言葉で押えたのである。宗教体験を人類のものとして開放しようとするところに、公共の国土を要求する必然性がある。国土とは、一切の自然環境と個人個人の行業の催す因縁をすべて含んでいる場所である。歴史と社会とを包んでいる場所である。その場を開いて仏道を成就しようとするのが浄土教である。

浄土とは仏陀の大慈悲心の現成せる場所である。故に浄土は「正道大慈悲なる、出世の善根より生ず」といわれるのである。大悲心の成就は回向によるというのが、仏道の伝統である。即ち菩提心は回向において公開性を見出すことができるのである。自己の願行の功德を回らし向けることにおいて、方向を異にせる衆生を仏道へ転じ向かせることができる。慈悲心は回向をもって、成就することができるのである。「回向を首として大悲心を成就することを得る」とはこのことである。大悲心の成就を開くものが回向であれば、浄土は回向によって、建立されるともいえよう。

親鸞は『浄土論』『論註』の伝統を通して、浄土の教学

の全体が大悲の回向によって成立することを教えられた。浄土とは大慈悲を表現する場所であるから、浄土の教えが回向によるということは同語反復のようである。しかし回向によって浄土の教学が成り立つと押えたことによって、「欲生せよ」との教言を、「願生彼国即得往生」という成就の文のところで押え直すことができるのである。単なる未来への往生ではなく、現前の信の一念に、「即得往生」の真情を見いだしつつ、無限の信の道程として、願生の契機を持続するのである。回向が大慈悲の回向であることを判明にすることによって、願生の未来性が、一念の内なる前念後念に取り込まれてくることのできたのである。すなわち大慈悲の回向であることにより、自力は無用無効となり、自力にとって未来の夢であったものが、本願成就の信心の事実の内面となるというのである。

しかして大慈悲の回向は、法蔵の名によって語られる大菩提心の、衆生を恵まんとする呼びかけである。国を生産し、国に人々を呼び来らしめ、共に願心を歩ましめんとする如来の悲心の表現である。これを親鸞は勅命という。「如来の国土に生れんと欲え」という至上命令である。

欲生心が回向心であるという直接の証文は、願成就の文である。親鸞はこれを「欲生心成就の文」と名づけている。「至心回向・願生彼国・即得往生・住不退転……」という。この「至心回向」の至心が、法蔵因位の願行を内容とするとき如来の真心なるが故に、回向は自力の回向ではないと決定し、「至心に回向したまへり」と訓んだのである。従って願生彼国は如来の回向心の成就である。「欲生」を積する文の内容が、回向心たることを明す文で占められているのは、願生心が個人的安逸境への逃避心ではないことを示すためである。回向は大乗菩薩道の実践の伝統から生れた概念であり、大慈悲の表現の言葉である。欲生心が回向心であるとは、欲生心が信心における公開性を与えるものであり、公開された信心そのものが、如来の慈悲心より賜わるものであることを明示するためである。信心が一切善悪の凡夫を撰する大慈悲心の国土を見いだすが故に、回向成就の信心として本當の仏法の平等の広さをもちうるのである。法蔵願心が誓う浄土建立の言葉は、すべての存在をして仏法聴聞の集まりとしよとす内容で満たされている。だからこそ「衆生と共に往生せん」という回向心が、その背面に「方便力成就して生死の稠林に回入せん」という意

味を含むと、曇鸞が解釈しうるのである。往還の回向を内容とするものが欲生心である。欲生心は、願生浄土の心であると同時に、無仏の国土に願生して仏事を行ぜんと意を見通している。これによって信心が大乗仏道の根源たる大菩提心となりうることをうる。信心が本願力の回向による大信心海であるといわれるのは、信心が公けの立場を開くものであるからである。法蔵の願心が衆生を撰めとらうと誓うとともに、撰めとられて浄土の生を享けたものは、自ら諸国を歴遊して普賢行を修するものとなってほしいと願うのである。しかれば欲生とは、三帰の第三たる帰依僧の願いに本當に応えようとするものであるといえよう。

五

至信心樂欲生の三心は、邪智分別を寂滅せしめる真智と、身心満足の真情と、公開された平等の法界への意欲とである。これはまた、諸仏求道の歩みが明証する真実の教言の歴史的發遣と、宗教的体験の与える歓喜による人間の自立自足と、不惜身命の志願を与えて励ます共同体への祈念であるといひ換えることができよう。

親鸞は「信巻」の初めに、信心の三相に応じて三つの

功徳を語っている。「たまたま淨信を獲ば、この心顛倒せず、この心虚偽ならず、ここをもって極悪深重の衆生、大慶喜心を得、もろもろの聖尊の重愛を獲るなり」と。不顛倒・不虚偽は、真にして実なることを表わし、信心が真の知恵であり、虚偽なきまことなることである。極悪の衆生が大慶喜心を得ることは、経・論に語られ、現前の宗教体験の証しするところである。そして欲生心に対応するところに、「獲諸聖尊重愛」の語が置かれてきた。現生の十益の中にも、冥衆護持、諸仏護念、諸仏稱讚というような利益を語っているが、諸仏を初めとする一切の存在から尊重され敬愛され護持されてあるという表白には、存在が孤独ではなく、大いなる法界の開けを見いだしていることの実感がある。欲生という語の内面が回向であるということ、聖尊の重愛を獲るという言葉で語るの、自力の努力なくして極悪深重の衆生に与えられる共同体の語りかけを示さんとするものであると思う。諸仏菩薩の共通の喜びが、煩惱愚痴の身に与えられる。そこに欲生心の止まることなき歩みが与えられる。常に諸仏の護念の中にあるということは、諸仏と恒常に対面していることである。如来の家にも喩えられるように、仏道を求め、涅槃の至徳を欲するものの生活は、歎

喜の一念の時より如来の共同体の中にある。大乘仏教の共同体は、個々に戒行具足の人格者たちの声聞僧伽ではない。共に道を求め法を聞く善悪の凡夫人に与えられる公開せる生活の場所である。大乘仏教が在家の菩薩の共同体を見開き、菩薩僧(大般若経・十住論など)という概念を生み出したように、聞法の共同体は、諸仏菩薩の発遣によって、三世の求法の存在に開かれた。未来世の衆生までも摂しつくして国土としようというところに、広大なる浄土の大会衆の共同体が語られてくるのである。

三宝を念ずるということは、經典でもしばしば語られ、論師たちは必ず三帰の表明の上で論積を造ってきた。十地の菩薩道にも、三宝を念ずるということは、初地から十地に至る各地に一貫して確かめられている。浄土とは三寶具足の場所であるということもしばしば語られている。三宝とは、第一に宗教的体験を実現した主体たる仏であり、第二に宗教体験を基礎づけ、それを発起し、その内容となる法、法爾の道理であり、また教言の真実なる法である。第三にその教法を聞き、法に生きんとする人々の共同体、僧伽である。この三宝に帰命することが仏道の始めであり、終りでもある。この三宝を信じ、三宝を貴び、三宝に自己を捧げることにより、常に三宝が

ら護られ、三宝に召されるのである。

親鸞は念仏の信心に、仏教徒が伝えてきた三宝帰依の態度とその功德が自ずから具せられること、より積極的にいえば三帰の実践というも、実は念仏の信心において本当に具体化するものであることを見いだしたのである。遇い難くして仏の大悲心に会い、信じ難くして本願の教法に信順し、値い難き師友に恵まれて、信海一味の浄土の共同体に召されるのである。三帰は、眞実信心の三相の中に、より深く念ぜられてある。三帰の伝統は、今現在説法の仏、常住の法、そして廣大無辺の共同体を浄土教によって見開いた。一心帰命の念仏は、諸仏平等の法界の発遣によって、三宝を念々に再興しつつあるのである。「三宝を紹隆せん」との願いは、三宝が滅尽するとも、この経は止住せんとの誓いを通して、称名念仏の信心によって受け継がれたというべきであろう。

我等は愚鈍にして邪悪なる身心のままに、法蔵願心の回向表現たる信念を得て、三宝常在の生活が与えられるのである。「三宝に帰すれば魔も壊せず」(化巻)といわれ、「三宝に帰敬して天神を信ぜず」(同)ともいわれるように、三宝を念ずる心が、仏弟子の生活となることは疑いえない。その三宝を「聞其名号」において与えよう、

願生・即生する三宝具現の生活たらしめようというのが、『大経』の所説であるともいえよう。化土には三宝見聞の益がないという智慧段の教説も親しく思い合せられるのである。

三宝帰命が、人間の深い要求としての自立と尊嚴の回復に答える道である。これは、大小乗を問わず、在家出家を問わず、仏教に帰するものは、みな三帰依を称念してきたことでも明白である。宗教的人格と出会い、道理を教示する法と出会い、そして眞の師友と出会う。そこに人間は自己の努力を超えて自己を捧げられる公けの生活に出られるのである。親鸞の「信巻」の積は、本願力回向の大悲において、我等の獲得する信念が、この三宝具現の信であり、仏道の伝統を本当に回復する道であることを示している。

確かに親鸞は非僧非俗といっている。僧宝に対しては、自らは非僧と宣言される。けれども、浄土の僧伽は、僧伽に入る資格なくして、金剛心の行人となり、眞の仏弟子となると開かれる。いわゆる僧伽の外なる僧伽に召されるところに、眞実信心の具体的な共同体があるのである。だからこそ、在俗の生活のままに、愛欲名

執筆者住所が掲載されているため
リボジトリ非公開とする。

利の生活のままに「非俗」であるといえるのである。五濁悪世の信仰共同体は、信心を生み出していくところに、汚泥の蓮華のような意味をもつ。如来の名における大悲

心の成就とは、煩惱の身に三宝を仰ぐ生活を成りたしめるのであると思われるのである。